

オトレンバ著
藪内芳彦訳

一般工業地理学

本書は Dr. Rudolf Rütgens の編集にかか
る Erde und Weltwirtschaft の第三巻とし
て、ハンブルグ大学教授 Dr. Erich Ottenba
によつて著わされた Allgemeine Agrar-
und Industriegeographie, 1952 のうや、そ
の第二部 Allgemeine Industriegeographie
の全訳である。農業に関する第一部について
は、すでに「史料」三七ノ二において浮田典
良氏が、「人文地理」八ノ三において藪内氏
がそれぞれ概要を紹介し、また近く藪内氏に
よつてその全訳が出版される予定である。

戦後のわが国地理学、とくに経済地理学の
動向が、社会構造、ないしは経済構造を中心
とした地域の構造的把握にあることは訳者の
指摘しているとおりでである。このさい地理学
は、他の社会諸科学の研究方法をとりいれて
いるのであるが、その結果として、地理学独
自の方法論がとかく見失われがちになつてい
る。工業地理学の分野においてことにこの感

が深い、ここに訳者によつて本書が広くわ
が国に紹介されたことは、きわめて有意義な
ことだといわねばならない。それは、本書が
たんなる工業分布現象の解説書ではなく、ま
た抽象的理論の空転に終始するものでもな
く、現実の地域的現象に則しながら、しかも
工業地理学の方法論を追求しようとしている
からである。本書に述べられている個々の事
柄は、けつして目新しいものではない。しか
し、全体を通読してうける感じは鮮新であ
り、示唆に富んでいる。これは本書が明確な
方法論をもち、首尾一貫してそれが生かされ
ているからであらう。

著者のとらうとする態度は、地域の自然構
造と社会的・経済的構造との有機的関連づけ
である。したがつて、それはたんなる工業景
観学ではなく、また工業立地学でもない。景
観論的観察や、立地論的考察は、工業地理学
の有用な研究手段ではあつても、究極的目的
ではない。「空間的結合において立地及び地
域の工業構造」を問題にしようとするのが、
著者の態度である。以下順を追つて、著者の
態度を紹介していこう。

工業地理学の発展、立場及び任務 ここで

は、工業地理学にたいする著者の基本的態度
が明らかにされている。それは要約すれば、
「工業立地、工業地域、工業景観、工業圏を
その空間的な作用構造において研究し、記述
すると共に、地球の全体の経済空間の工業の
構造と編成を研究するもの」だとされる。つ
まり工業地理学の対象は所与としての工業地
域であり、その空間的な作用構造である。理
論的に割り出される個々の工業の最適立地に
関する問題は、工業経営学の課題であつて、
工業地理学の究極目標ではない。最適地点で
あらうとなかろうと、現実には工業が立地して
おれば、それが研究の対象となるのであり、
そこに見出される原料・動力・市場などの空
間的結合関係が問題となるのである。要する
に工業地理学は、工業空間内の個々の構成要
素——自然的・社会的——の結合関係をと
り、それらの作用構造を考察し、さらに
経営規模・技術・労働意識・経済目的など
も考慮に加えて、統一体としての「空間と結
びついた工業様式」の分布状態を研究対象と
するのである。

人間の工業活動空間 この章では、歴史的
にみた工業地域の発展と移動、および工業地

域を形成せしめる自然的基盤——エネルギー
1・原料・地形・水——についての一般的考察が行われている。工業における自然的役割は農業にくらべれば低いが、「工業活動が最高の利得をあげようとすれば、自然は全くひとりでにはいりこんでくる」ものであるとして、著者は多くの例をあげながら、工業立地と自然との関係を追求している。

社会構造と経済精神、工業経済空間の基礎と形態要素 この章では、工業と社会的基盤との関係が考察されている。すなわち、人口・生活水準・文化水準・国家の経済政策などが工業立地あるいは工業地域の形成に及ぼす影響について考察し、さらにかかる諸要素が地域的に、統一的に結びついて、様式の異なる種々の工業圏——西ヨーロッパ・北アメリカ・ソ連・アジア・植民地——を形成することを明らかにしている。

地球の工業空間における経済的な秩序の法則 この章では、工業地域の分布あるいは工業立地にみられる一般的秩序（法則性）が考察されている。とくにここで著者が強調しているのは、経済学的立地論と工業地理学の立場の相違である。すなわち、経済学的立地論

は地理学的考察にとつて有用な手段ではあるが、それは所与としての現実の立地の解決に決定に役立つものではないとして、経済学的（純理論的）立地論に立つて地理学的体系を建設することを極力認め、地理学の立場は、あくまで現実の立地、あるいは工業地域の考察から出発すべきことを強調している。なお著者はここで歴史的考察の必要なことを説いているが、これは経済学的立地論が資本制社会においてのみ適用するということを考えれば、当然なことである。所与としての工業地域の考察から出発する地理学の立場からすれば、原因の探究は当然過去にさかのぼらねばならぬのである。

以上が著者の考える工業地理学の性格であり、このような立場に基づいて、著者はさらに「比較類型学的観察における地球の工業地域と工業立地」および「工業地理学的地誌学及び景観学の選ばれた例証」の二章を設けている。前者では各種工業の分布にみられる空間的秩序が取り扱われ、後者では工業地域——日本・インド・南阿連邦・エジプト・アルゼンチン・北西ヨーロッパ——を通してみた工業の空間的作用構造が考察されている。

ところで、本書を通じてみられる特色は、前にも述べたように、著者が明確な方法論を打ち立て、しかも方法論がたんなる概念の遊戲として空転していないことである。そうしてその方法論は、地理学が伝統的に受けついできた自然的基盤と社会的基盤との有機的関連づけを目標としており、しかも自然的役割に過度の比重を与えず、また他の社会諸科学の知識をも取り入れようとしている。たしかに本書は、工業地理学の進むべき途を示した点で大きい意義をもつているといえよう。もつとも、その方法論にはなお多くの問題点が残されているように思われる。たとえば、工業立地に関する問題で、著者が経済学的立場と地理学的立場を明確に区別しているのは正鵠をえているが、経済学的立地論はもつと積極的に地理学に導入さるべきであろう。理論的・科学的・数学的考察を加えることは、地理学の発達にとつてきわめて必要なことである。要するに本書は、訳者もいう如く、「オリジナリテイに満ちた」ものであるが、「やつと上様式を終つたばかりの、太い鉄骨のまゝのみの建築」にも比せられよう。（朝倉書店発行、定価四〇〇円）

——西村隆男——